

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號二第

卷三十三第

行發日一月八年六和昭

論叢

經濟的變動の分析 文學博士 高田 保馬
デイルタイ哲學と經濟哲學 經濟學博士 石川 興二

時論

特別會計の整理 法學博士 神戸 正雄
所得稅の稅率の改正 經濟學博士 汐見 三郎

研究

農家における米の販賣 經濟學士 谷口 吉彦
統計利用の意義と問題 經濟學士 蜷川 虎三
東海道濱松宿に關する一考察 經濟學士 大山敷 太郎

說苑

明治初年御用金の負擔者について 經濟學博士 本庄榮治郎
産米の管外移出高の季節的變動 經濟學士 八木芳之助
金問題批判 經濟學士 松岡 孝兒
アンドレアデス氏「日本の人口」について 經濟學士 宮本 又次

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

アンドレ
アデス氏 「日本の人口」に就て

宮本又次

世界的學者として名ある希臘雅典府の A. Andrenides 老教授は、過般東京に開催された第十九回統計協會會議に出席されたが、その際蒐集された資料と、調査し見聞された事實に該博な考察を加へ、以て「日本の人口」"La population du Japon"なる一文を草し、最近 *Revue Economique Internationale*, Janvier 1931. 誌上に發表された。以下はその要旨を紹介せんとするものである。

アンドレアデス氏の論文は前後二篇に分れ、前篇に於ては一八六八年以前の日本の人口を取扱ひ、後篇は維新以後の日本の人口に當てられてゐる。その行論

の順序は次の如くである。前篇 第一節 七世紀より十七世紀迄 第二節 一七二一年より一八一六年迄 第三節 一八一六年より一八六八年迄 後篇 第一節 人口學的發展 (a) 實現された進歩 (b) 克服すべき障碍 (c) 人口學的進歩の説明 第二節 人口の區分 (1) 都市及び田舎の人口 (2) 職業による區別 (3) 性による區分 (4) 國民性による區分

以上は菊版五二頁にわたつて述べられてゐるが、その内吾々の問題とし且關心を有するものは主として前篇即ち維新以前に就てであるから、本稿は専らその前篇のみについて検討する事とする。抑外人の日本經濟に關する研究は既に可なりの數に登つてゐるが、直接に人口を主題として取扱つた論著としては *Droppers; The population of Japan in the Tokugawa period* (*Transactions of the Asiatic Society of Japan*) の劃期的な名著ある外は、あまり知られてをらず、そのドロップス氏の論文が既に時代を経た今日こゝにアンドレアデス氏の簡明にして包括的な研究を加へ得た事は誠

に慶賀に堪へざる所である。然も著者が親しく最近の日本を訪ね、且つ多く日本人の手になる論著を引用せる事は特筆すべき事柄である。その中前篇に關しては Droppers 氏の前掲書を初めとし、ワシントン大學教授 Goven 氏の「An outline history of Japan」や M. E. Cosenza ; The complete journal of Townsend Harris や竹越氏「日本經濟史」の英譯 The economic aspect of the history of civilization in Japan (3 volumes, London, 1930) 等を最も多く参照し、就中本庄博士が第十九回統計協會會議に提出された「The population and its problems in the Tokugawa Era」を、同會議に提出された諸論文中第一流に位する研究であると推賞し、且「京都帝國大學經濟學部紀要」に掲載された同博士の「The agrarian problem in the Tokugawa regime」と共に、最も多く引用し且依據されてゐる。

二

前篇第一節は七世紀乃至十七世紀間の日本人口を取扱つてゐるが、A氏はこの殆んど十二世紀間にわたる

アンドレアデメ氏「日本の人口」に就て

歴史期間に適確な調査資料の缺如せる事をかこちつゝ、僅かに統計局發行のバンフレットに據り、簡單なる概觀を試みられてゐる。

年次	人口
610	4,988,842
710—780	5乃至6,000,000
650—1150	8,833,290
736	8,631,770
1528	4,918,652
1560	4,994,808
1721	26,065,429

A氏は一一五〇年と一五六〇年間の急激な下落と、それに次ぐ急激な高騰とに注目し、この下落を内亂と天災とに歸してゐる。又大化改新

前に支配的であつた原始生産業の従事者は百萬を越えずとなすゴウエン³⁾の見積りにも拘らず、右の表が六一〇年に四百九十萬人を示す事を訝かつてゐる。尙又一五六〇年より一七二一年間に人口が五倍した飛躍に驚いてゐる。然もこの期間の初め四半分が所謂戰國の世であり、且十八世の初めの部分が既にある程度迄、後世人口減少の誘因をなす社會的・道德的要因により影響されたであらうと指摘し、この飛躍が百六十年でなしに

1) Kyoto University Economic Review.
 2) La population du Japon, appendice.
 3) Page 86.

百年間になされたに違ひないと推定して、そこに疑ひをさしはさんでゐる。かくてこの期間に關しては、假令間接的であらうとも今後新しい文書が発見され、以て日本の學者達が此等の點に就き教示して呉れるやうにとA氏は切に希望してゐる。

三

第二章は一七二一年より一八一六年迄に當てられてゐる。徳川氏は一七二一年以來屢々人口調査を行つたけれども、その調査實施には缺陷があつて、小兒や武家階級の遺漏がある事をA氏は指摘し、その理由はドロツバース氏に依れば租稅的理由から、本庄氏に依れば軍事的念慮から出てゐる事に言及し、十八世紀の歐洲に於ても亦近隣諸國が自國の計數に通ずる事を好まず、人口數を秘密にした事を思ひ合してゐる。

この期間に於ける人口の靜止或は低落傾向の原因に關しては、A氏は日本の政治制度が封建制であり、經濟組織が鎖國經濟であつた事をあげ、かのチヌルゴの才を以てするも容易に改廢し得なかつた泰西の同職

組合よりも、更に更に錯綜した株仲間制度が存在し、各々特權と獨占とを擁して、商工業の發達を阻んでゐた事實に觸れ、農村の疲弊、奢侈安逸の風等を擧げて、かかる事情からは當然に人口増加を妨げる經濟的道德的要因を生ぜざるを得ないとしてゐる。消費階級たる武士の多數と、それを負擔する農民生活の困難とは、人口の都市集中傾向と墮胎殺兒の惡風とを惹起した。加ふるに、飢饉・疫病の頻發は、この人口減少を助長した。A氏は墮胎殺兒の流行は上級階級が例を示すことにより一層擴まつたとし、二、三人以上の子を有する侍は奇妙に思はれたと云ふ「中井竹山」の言を引いて、武士階級に於ける小家族の事を述べてゐる。ドロツバース氏は武士の小家族を、晩婚を賞讚する儒教の影響に歸し、又今日よりも更に大規模で公然と行はれてゐた賣淫や、殊に帝國の西南に於て盛に行はれた男色の影響に歸してゐるが、A氏はこれ等の要素以外に經濟的理由を加へねばならぬとしてゐる。即ち武士は一種の騎士であり、ある社會的地位を有するに拘らずその

所得は限定され、その體面を保つことは困難だつたのである。ここから産兒制限が出てくる。A氏はこの事情と古代スバルタのそれとを比較對照してゐる。古代スバルタの人口は *Peliques* と *Ilotes* との二階級に分れ、前者は一定の所得即ち *hiores* に依つて耕作された物の分前を受けてゐる軍人階級であつて、一定の支出をなす條件を以てのみ、その地位を保つことが出来た。一定の支出とは *Expenditures* の支出、即ち一種の將校會食費の如きものを云ふ。この結果は彼等を産兒制限に導いた⁴⁾。この古代スバルタと日本との接近は誠に興味深い事である。それはともかく、A氏は墮胎殺兒が武士を初め農村に一般化してゐた事を挙げ、この悲しむべき現象が爲政者の心を動かし、人口制限に對する種々なる政策となつて現はれたが、その禁令はその原因を根治せず、只悪行の行はれることのみを取締つてゐたから、一時的効果を有するに過ぎず結局は無効に終つたと述べてゐる。

四

アンドレアデス氏「日本の人口」に就て

第三章は一八一六年より一八六八年間を取扱つてゐる。本庄博士の優れた研究が一七二一年以前に遡及せざると共に、この十九世紀にも僅かしか觸れてゐないのを遺憾としてゐる。十九世紀には次の數字を擧げてゐる。

年次	人口	指數
一八〇四	二五、五一七、七二九	九六、五〇
一八一六	二五、六二一、九五七	九六、五〇
一八二八	二七、二〇一、四〇〇	一〇二、四五
一八三四	二七、〇六三、九〇七	一〇一、九三
一八四六	二六、九〇七、六二五	一〇一、三五

此等數字にも亦小兒や侍階級その他の數が省かれてゐる。小宮山氏はその省略された人數を二百六十萬と見積り、一八四六年の人口を二九、五六三、九〇七と推算されたが、本庄博士亦この數字を借用され、徳川後期の人口推算を二八、〇〇〇、〇〇〇乃至三〇、〇〇〇、〇〇〇とされてゐる。此に對しA氏は一八四六年より一八六八年間に著しい増加數があつたに違ひないと推定されてゐる。若し然らずとせば、一八七二年の調査が三四、八〇六、〇〇〇人であるから、明治の

4) Loc. cit. pp. 280, 284, 251.

5) Voy; Histoire des Finances grecques, tome I. (Athènes, 1928)

初め四ヶ年間の年々増加数が一、二〇〇、〇〇〇人でなければならぬ事になる。然るに、それに次ぐ一八七三年乃至一八七六年の四ヶ年の年々増加の全額が二〇〇、〇〇〇以下に止まつてゐればゐるほど、そうした事は不可能なわけとなる。⁶⁾かくてA氏は幕末の人口を三三、〇〇〇、〇〇〇以下ではなかつた筈だと主張しその主張を裏書きするものとしてタウンSEND・ハリスの情報を引用されてゐる。維新に先づ事十年に日本を訪ねたハリスは、その印象を記して『到る所住民は幸福に生活し、質實ではあるが、絶對的な安全を楽しんでゐた』と述べ、⁷⁾人口増加の有様を指示し、且彼が江戸に就て算出した人口数は、二、五九七、〇〇〇人で、前の時代に呈された數二、〇〇〇、〇〇〇よりも遙かに上であると云つてゐる。又調査を除外されてゐる武士階級に就てハリスは次の如き數を算出してゐる。⁹⁾

一萬人の家來を有する大名 一八名
 $18 \times 10,000 = 180,000$
 二千人の家來を有する中名 三四二名
 $342 \times 2,000 = 684,000$
 三百人の家來を有する小名 八〇〇〇名
 $8,000 \times 200 = 1,600,000$

2,464,000

即ち武士階級に屬するものは二、四六四、〇〇〇人となり、之を一八世紀の見積り約一、五〇〇、〇〇〇と比較せば、この點に於ても人口増加の事實を觀取するを得るであらう。かくA氏はハリスの記述を根據として人口増加を主張する外、幕末に於ける蘭學の發達を指摘し、それが醫學、藥學及び衛生思想の上に進歩を與へ、殺兒或は病死の減少に役立つたであらうと記して幕末の人口増加を論證されてゐる。のみならず、社會的政治的大革命は長い胚胎期間に先きだたれなければ成功し得ないのが原則であるとなし、Alexis de Tocqueville¹⁰⁾の立證を挙げ、維新前二十五年間に於ける智的、道德的大覺醒を指摘して、この覺醒が人口上に反映し、その増加傾向を助長したであらうと高調されてゐる。明治維新以前の人口に關するA氏の説は大要以上の如くである。その説には從來の通説と異なる氏の推斷もあつて、同問題に關心を有する者にとつて、他山の石ともならば幸甚である。(完)

6) 1872から1876年迄に人口は34,806,000より35,555,000になつてゐる。

7) pp. 429, 441.

8) pp. 259.

9) Page 553.

10) Cf. L'ancien régime et la révolution.